

最期まで

出雲市立南中学校 三年 塩野桜太

昨年の夏、母から祖母がもう長く生きられないと聞かされた。朗らかでよく笑う優しい祖母だった。余りに突然のことでしばらくは信じることができなかった。告げられた祖母はどれほど辛かったか想像するだけで胸が苦しくなる。

祖母は入院してから三週間程経った頃

「家に帰りたい。」

と母に告げた。病気は急速に進み、簡単に家に帰れる状態ではなく、コロナ禍だったこともあり難しいと思った。しかし何とか祖母の希望を叶えたいと先生や家族で相談した。外泊は難しいが数時間の外出ならと先生の許可が出た。

家族と先生との相談で自宅でも使用できる痛み止めの点滴や酸素ボンベを使い、専門の業者の方をお願いしてストレッチャーで帰宅することになった。

家に帰り横たわった祖母は

「あ一家の天井だわ。」

と安心したように呟いた。五時間程、家族との時間を過ごし、病院に戻る車の中では少し寂しそうな表情だったが、母が

「疲れたでしょ。」

と聞くと

「楽しくて疲れなかったよ。」

と笑みを浮かべた。

二度目の帰宅から二週間後、祖母は家族に見守られながら静かに息を引き取った。

重い病気になれば、何かあった時にすぐに対処してもらえる病院で過ごすのが安心が一番良いという感覚が僕にはある。しかし残された時間が限られている人の気持ちになってみれば長らく過ごした家に帰りたいと思うのは当然だろう。しかし祖母と祖母を支える人達の姿を見てそれを実現することは容易ではないことを知った。

祖母は決して軽い気持ちで家に帰りたいと打ち明けた訳ではないと思う。帰宅したことで病状が重くなるかもしれない不安があったり、病院の方や家族に迷惑をかけるのではないかと躊躇したりもしただろう。しかし祖母は自分の気持ちをきちんと伝えた。祖母が思いを口に出した事で家族が動いた。そこから色々な方の力を借りて祖母の希望を叶えることができた。

人が最期を迎えるまでの時間は本人だけではなく家族にとってもかけがえのない時間だと思ふ。悲しい瞬間であっても希望を叶えてあげられて良かったとか、楽しい時間が一緒に過ごせて良かったという思いが救いだった。祖母が亡くなった後に親戚が口々に

「早いお別れだったけど皆に囲まれて尽くしてもらって幸せだったと思うよ。」

と言っていた。病気を宣告されてから短い時間だったが祖母は幸せな時間が過ごせたと僕

も信じている。祖母の気持ちを尊重し、実現できたことが家族にとっても唯一の救いだったと思う。中には家に帰りたくても状況によっては帰れない人も多くいるだろう。コロナ禍で家族に会えずに亡くなる人もいると聞いた。

祖母の気持ちを尊重することができたのは祖母がまず言葉を発したからだ。祖母が迷惑をかけたくないからと帰りたい気持ちを胸にしまったり、最初から帰ることを諦めたりして伝えなければ、リスクを冒してまで帰ることはなかったかもしれない。叶わないかもしれないことでもまず口に出すことで一歩進む。自分では実現できないことでも周りの人が力を貸してくれる。その光景を僕は目の当たりにした。一人でできることは限られているが様々な専門の人たちの力を借りれば無理だと思ったことも叶えられることを知った。

どんな人でも最期までその人がその人らしく生きていく権利がある。僕は祖母と周りの人の姿を通し、病気の人や残された時間が限られている人たちの気持ちを尊重できる社会を作っていきたいと思った。弱い立場の人でも気兼ねなく自由に言える環境を作ることが必要だと思う。そのためにまず自分自身が信頼され、何でも相談しやすい人になることを目指したい。まずは自分が周りに耳を傾け、しっかりと話を聞き、それを受け止める力をつけたい。そしてどうしたら困難なことでも実現できるのかを周りの人の協力を得ながら考える努力をしていこうと思う。また医療や機械の技術が発達したことによって、今までは叶えられなかったことも叶えられることがあるということも多くの人に知ってほしい。そして自分にもその手助けができれば良いと思う。よりたくさんの方が後悔なく幸せな時間を過ごせるように。